

# 澄憲から貞慶へ——『如意輪講式』をめぐる——

柴 佳世乃

はじめに

安居院流唱導で名を成した澄憲（一一二六—一二〇三）の撰述した『如意輪講式』が今に伝わる。七段から成るその講式は、藤原秀衡母の依頼によつて澄憲が草したと伝えられ、美麗な文章で構成された重厚な作品である。大覚寺藏本<sup>1</sup>、高野山大学図書館寄託金剛三昧院藏本、書写山圓教寺藏本<sup>2</sup>、菅見の限り五本の伝本が存する。安居院に伝わる澄憲の文章の類聚『転法輪鈔』目録に『如意輪講式』が見えることや、複数の伝本の奥書、内容の検討から、澄憲の真作と認められる。本七段式は、澄憲作であることに加え、内容や表現が秀逸なことによつてであろう、その後様々に享受された。例えば、式文や偈の一節が抜き出されて文学作品などに引用されたり、多様な改作の講式が生み出されたりと、その裾野は広い。澄憲の講式に関する研究は、従来その諸作品が知られていなかったこともあり、それらの影響の実態解明は緒についたばかりである。ここでは、澄憲『如意輪講式』の改作の一本を取り上げる。

醍醐寺に、三段式の『如意輪講式』が蔵されている。これは澄

憲の七段式の改作に他ならない。そして、その作者は、澄憲の甥にあたる貞慶（一一五五—一二一三）と認められる。貞慶は、鎌倉初期の南都を代表する碩学で、興福寺に長く住して法相宗学を牽引し、後には笠置寺に通世、海住山寺で入滅するまで、宗門内外にわたる多彩な活動を行った。とりわけ、法会における論義・講説で名声を博し、表白・願文・諷誦文・講式など優れた多くの作を残して、同学後学に影響を与え続けた。貞慶は、澄憲とは甥叔父の関係にあるが、これまで両者の文章などを通じた直接の関係は確認されていない。貞慶が、澄憲の講式を改作してひとつの作品としている事実は、両者の関係や書物の継承、あるいは仏事法会に関わる営みの同時代的広がりを考える上で、一石を投ずるものと思われる。

本稿では、澄憲の『如意輪講式』を同時代の中で立体的に捉えるべく、改作された貞慶作三段式『如意輪講式』を取り上げる。貞慶の三段式を澄憲作七段式に具に対応させて考察することで、澄憲作品の位相のみならず、貞慶の営為を浮き彫りにしたい。

## 一 貞慶と『如意輪講式』

平安末から鎌倉初期にかけては、講式が多く作られた。講式とは、仏菩薩・明王・天・神祇諸尊・祖師先徳などの徳を讃歎した式文を唱える一連の式次第である。式文は、経典や経疏などを多く引用しつつ、流麗な文体で練り上げられている。特有の曲節を伴った、唱えて美しい式文と伽陀は、聴く者に経文の内容や功徳を印象づけるのに大変効果的である。講式が多く撰述され勤修されたのは、世俗にも教義や仏菩薩などの功徳を知らしめんとする当時の仏教文化をめぐる潮流が色濃く背景にある。

講式の時代とも言うべきその只中であつて、多彩な作品を生み出した一人が貞慶である。四座講式を撰述し、自ら勤修した様子が伝わる明恵(一一七三―一二三二)らとともに、貞慶は講式作者としてよく知られ、残した作品は、二十を優に超える。建久三年(一一九二)に作成された『舍利講式』『発心講式』を皮切りに、『別願講式』、『弥勒講式』、『欣求靈山講式』等々と、次々に講式を撰述した。

観音に関しては、貞慶は、現在知られる限り、三種の「観音講式」を起草している。建仁元年(一二〇一)五月十七日に五段の『観音講式』を、同年同月二十三日に三段の『観音講式』を、そして承元三年(一二〇九)に七段の『観音講式』(『値遇観音講式』とも)を撰述したことが知られる。最初の五段式は、女人のために草したとされ、奥書に、「女人等雖用世俗之詞、其趣尤賤。願結縁之人共値遇観音。又報悲母等恩愛矣。沙門貞慶」と記す。そ

の六日後に著された三段式は、「世間男女」のためとされ、同じく奥書に「為世間男女以別願記之。其詞雖賤、其志不輕。沙門貞慶」とその趣旨を述べる。自らの行いのため、あるいは仏菩薩の利益と功徳を世に広めるため、述作の依頼に応ずる機会もあつて、多くの講式を著したのであつた。

さて、そのような貞慶の手に成る、澄憲作七段式『如意輪講式』の三段式への改作が残されている。三段式『如意輪講式』は、管見の限り、醍醐寺蔵の二本が存する。そのうち一本の書き付けに「此の式、解脱房の草か」(原漢文)とある。すなわち、解脱上人貞慶の作と目されてきた作品であつたが、澄憲七段式と同様に、これまで大きく取り上げられることはなかつた。

三段式『如意輪講式』を貞慶の真作と見る理由は、大きく以下の四点による。

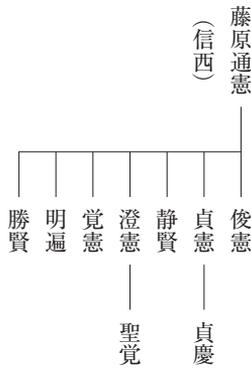
- 一、写本の書き付けに、貞慶作かとされていること。
- 二、『如意輪講式』が書写された後に、貞慶の三段式『観音講式』がその料紙裏に書写され、表裏で伝来していること。
- 三、澄憲作七段式の式文を周到に改作した内容を持つこと。
- 四、三段式『如意輪講式』の冒頭部が、貞慶『観音講式』と同一であること。

貞慶が七段式『如意輪講式』を改作して三段式に仕上げた時期は不明であり、またどのように澄憲七段式を手にしたのかは明らかでない。しかしながら、醍醐寺蔵の鎌倉写本が、貞慶作の三段式『観音講式』と表裏で書写されていることには注意を払っておきたい。書写の紙の状態、墨付きから、三段式『如意輪講式』が書写された後に、その料紙裏を用いて『観音講式』が書写された

と推定される<sup>10)</sup>。撰述過程には直接に関わらないことがらであるが、両講式の成立が近いことをも想像させる。後述するように、内容の近似もまた認められるのである。

本稿では、右に掲げた四点のうち三・四を中心に、式文の内容に踏み込んで論ずることとする。

貞慶の父貞憲は、藤原通憲（信西）を父とし、澄憲とは同母兄弟である。一族には、安居院澄憲をはじめ、南都北嶺の碩学が輩出した。



〔尊卑分脈〕より抄掲

南都を活躍の場とする貞慶は、安居院流の澄憲とは、血縁が近いにもかかわらず、これまで直接の連繋を伝えるものはなかった。両者の宗門は異なり、相互に高く認識していたという伝承はあっても、直接の関わりは不明であった。しかし、『如意輪講式』を媒介として、両者を繋ぐ糸が確かに浮かび上がる。澄憲の『如意輪講式』を貞慶が改作している事実は、安居院（ここでは澄憲）の文献を貞慶が手にし、これに取り組んだ具体相を示すものである。人的交流や書物の移動に関して大変興味深い、現在のところ

るは、この一篇からのみしかわからない。

## 二 貞慶作三段式『如意輪講式』の方法

澄憲七段式『如意輪講式』（以下、「澄憲七段式」と略記）の改作は、管見の限り、三種が存する。一つは、本稿に取り上げる貞慶作の三段式（以下、「貞慶三段式」）であり、一つは、魚山叢書（覚秀本）に収められた五段式であり、今一つは、真言宗の如意輪寺（徳島県）に伝わる三段式（近世の改作）である。貞慶三段式以外の二つの講式は、それぞれ澄憲七段式を適宜抄出した上で文言を改変したり、各段を接合したりして一つの式としている。その方法もまた、講式というもののありようを示したいへん興味深い、それらを傍らに置くと、貞慶の改作の方法の独自性が際立つ。貞慶は、改作にあたって、澄憲の文章にはほゞ一切加筆することなく、対句単位で省略を施し、首尾一貫した一つの式に仕立てているのである。対句表現や内容への深い理解がなければ成し得ない改作であり、貞慶から澄憲への眼差しが透けて見える。澄憲の類い稀な美文に考慮し、それらに余分な手を加えることなく、対句や構成に配慮した抄出方法を採用しているのである。講式作者としての手腕が遺憾なく発揮されていると言えよう。

七段式は段数も多く、文章も長大で、実際に法会として行うには時間も導師の技量も必要であり、より簡略版として整えたいと思しい。その際、貞慶は、七段のうち、表白・第四段・第六段・第七段を選び取り三段にまとめたのであった。以下に、澄憲七段式の構成を掲げ、貞慶の用いた各段に\*を付した。

表白\*

- 第一 観音本源門
- 第二 名号讚歎門
- 第三 形声応作門
- 第四 本願利益門\*
- 第五 宿縁厚故門
- 第六 如意福德門\*
- 第七 往生極樂門\*

結章文（\*伽陀のみ）

貞慶が用いたこの三段は、如意輪観音の本願と功德とを表し、極樂往生をも説く主要段である。採られなかつた第一段、第二段、第三段、第五段は、それぞれ、如意輪観音の阿弥陀仏との関わり、名号の意味、その像容の説明、そして日本国との厚い縁が語られ、各段ごとに美麗な文章で綴られて相互に緊密に七段を構成するもので、如意輪観音について詳細に掘り下げて説く章段と言えよう。貞慶が、それらの四つの段を用いず、如意輪観音の本願や功德をダイレクトにうたう章段を特に選び取り、三段式と成していることは注目に値する。二つの段を接合して一段にしたり、七段全体から抄出して三段に仕立てるといった方法を採用せずに、この三つの段を選び取ったところに、まず貞慶の方法の特色があるだろう。この三段を選択してコンパクトにまとめることで如意輪観音の誓願と功德は際立ち、より一般に浸透しやすい内容を以て立ち現れる。

さらに各段の式文に分け入って見てみると、適宜省略が施され、分量が多少縮められている。その方法を、順に見ていこう。以下

に、表白から第三門まで式文を掲げ、貞慶の改作の方法を具に眺め渡すこととする。

表白を初めとして各段ごとに澄憲七段式の式文を掲げ、貞慶三段式が用いた文章に傍線を引いた。なお、式文は、大覚寺藏本を底本として翻刻し、対句の形態がわかるように私に行取りを行って示した。また便宜的に、行頭には各段ごと冒頭からの行数を付した。返り点は原文のまま、読み仮名は省略した（送り仮名は、意味を取りやすいように概ね残した）。貞慶三段式は、多少の返り点（および読み仮名）の違いはあるが、文字句はほぼ同一である。改変されている文字には、右横に「」を付して貞慶三段式の文字句を示した。傍線を辿ればすなわち、貞慶三段式の式文の全容となる。貞慶が、対句を的確に捉え、その意味内容に基づいて周到に省略を行っていることが浮かび上がるだろう。

【表白】

1 敬白法界法身摩訶毘盧遮那 実修実証盧舍那界会

一代教主牟尼薄伽 九品能化弥陀種覚

十方法界証菩提者 去來現在応正遍知

八万十二権実正教 無障礙経甚深妙典

5 観音勢至諸大菩薩 阿難迦葉諸大声聞

殊ニハ補陀落安養清浄集会、蓮華部中諸賢聖衆、

惣テハ一心法界光明心殿、理性随縁塵刹海会、三宝玉境界ニ驚カシ言サク、

伏テ惟ハ、人中天上之浮華開落、幾ノ春ノ風ノ。

苦海愛河之流水沈浮、多ノ夕ノ浪。

10 生生ニタシト々セシタハ、鉄床火地上、

処処ニ々々ト々々セシタハ、刀山劔樹ノ下。

善趣ニハ難ク生ジ、

惡道ニハ易キ歸リ者也。

粵ニ毫夢虚夢之中ニ、稀ニ受テ日域馬台之人身ヲ、

15 輪転浮生之間ニ、償遇<sup>レ</sup>月支鵝王之教跡<sup>ニ</sup>。

然ニ歲月海ニ傾<sup>ラ</sup>ク。孰<sup>カ</sup>カセム翌日之暈<sup>ヲ</sup>。

冥路稍<sup>ク</sup>近<sup>ク</sup>、須<sup>ク</sup>蓄<sup>フ</sup>夜台之根<sup>ヲ</sup>。

茲<sup>ヲ</sup>以テ、偏<sup>シ</sup>仰テ一尊之汲引<sup>ヲ</sup>、

欲<sup>フ</sup>禱<sup>ラ</sup>ムト二世之雍熙<sup>ヲ</sup>。

20 夫十方聖衆ノ中、觀自在慈悲惟深重<sup>ニ</sup>。

六觀世音ノ内ニハ、如意輪ノ利生尤<sup>モ</sup>掲焉<sup>ナリ</sup>。

繇<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>ニ、今翅<sup>テ</sup>一座七門之講肆<sup>ヲ</sup>、

早<sup>ク</sup>預<sup>ラ</sup>ムニ求<sup>ム</sup>兩願之満足<sup>ヲ</sup>。

然則、速<sup>ク</sup>恣<sup>ニ</sup>鄭白陳紅之景福<sup>ヲ</sup>、

25 永<sup>ク</sup>保<sup>テ</sup>ム黄牙白石之遐算<sup>ヲ</sup>。

加之、眼前<sup>ニ</sup>誇<sup>テ</sup>不老之赤泉<sup>ヲ</sup>、伴<sup>ヒ</sup>椿葉之影<sup>ヲ</sup>、

身後<sup>ニ</sup>遊<sup>シ</sup>迎接之紫白<sup>ヲ</sup>、俟<sup>ム</sup>荷華之披<sup>ヲ</sup>。

立片言<sup>ヲ</sup>以テ居<sup>スル</sup>ニ要<sup>ス</sup>、乃<sup>チ</sup>梗概之啓白<sup>ナリ</sup>。

懇篤之志不能<sup>ハ</sup>叢脞<sup>スル</sup>ニ。具<sup>ナル</sup>旨在<sup>リ</sup>仏界之照覽<sup>ニ</sup>已<sup>レ</sup>而。

30 今此講演<sup>ノ</sup>物有<sup>リ</sup>七門。一者観音本源門、二名号讚歎門、三形声

応作門、四本願利益門、五宿縁原故門、六者如意福德門、七者

往生極樂門。

表白においては、冒頭の仏菩薩への敬白部分の改変が、まず重要である。澄憲七段式の冒頭部（1〜7行目。以下、行数の番号

のみを示す）を、貞慶三段式は以下のように改変する。

敬白大恩教主釈迦牟尼如来、十方三世一切三宝、殊大慈大悲

観自在尊、補陀洛山無数聖衆<sup>ニ</sup>而言<sup>シ</sup>、

これは、講式改作にあたって、貞慶が新たな文言に変更した唯一の箇所である。澄憲式に比してよりコンパクトにまとめられている。そして大変興味深いことに、右の文言は、貞慶の三段式

『観音講式』の表白冒頭部分と全くの同一である。貞慶が三段式

『如意輪講式』の作者に比定されるであろう、見過ごせない改変

である。

さらに、澄憲が比喩表現を多用して重厚な表現を作り上げているところを、貞慶は対句単位で省略して縮めている（10〜11、24

〜25）。隔句対を、上句のみを省略して単句対に仕立てているところもある（14〜15）。いずれも、対偶表現を十分に理解しつつ、

全体の構成を考慮せねばできない省略方法である。省略を施す際には、「加<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>」などの接続の詞を省いたり（26）、あるいは

「<sup>レ</sup>粵<sup>フ</sup>」などはあえて残して後の句と接合したりして（14）、細部

まで行き届いた意識が感じられる。

末尾部分にも、その意識は光る。澄憲が「〜梗概之啓白<sup>ナリ</sup>」

（28）とうたうところは省き、各門の紹介をする最末尾では、「物

有<sup>リ</sup>七門」を「略有三門」とする（30）。細部にわたって周到に省

略し、文言を整えていることがわかるのである。

【第一「本願利益門」…澄憲七段式の第四門】

1 第四本願利益門者、前<sup>ニ</sup>明<sup>シ</sup>形声ノ応用<sup>ヲ</sup>、次<sup>ニ</sup>明<sup>サ</sup>本誓ノ悲願<sup>ヲ</sup>。

夫<sup>レ</sup>此菩薩者、侍<sup>テ</sup>多千億仏<sup>ニ</sup>、発<sup>シ</sup>大清淨ノ願<sup>ヲ</sup>、

夫<sup>レ</sup>此菩薩者、侍<sup>テ</sup>多千億仏<sup>ニ</sup>、発<sup>シ</sup>大清淨ノ願<sup>ヲ</sup>、

夫<sup>レ</sup>此菩薩者、侍<sup>テ</sup>多千億仏<sup>ニ</sup>、発<sup>シ</sup>大清淨ノ願<sup>ヲ</sup>、

夫<sup>レ</sup>此菩薩者、侍<sup>テ</sup>多千億仏<sup>ニ</sup>、発<sup>シ</sup>大清淨ノ願<sup>ヲ</sup>、

夫<sup>レ</sup>此菩薩者、侍<sup>テ</sup>多千億仏<sup>ニ</sup>、発<sup>シ</sup>大清淨ノ願<sup>ヲ</sup>、

夫<sup>レ</sup>此菩薩者、侍<sup>テ</sup>多千億仏<sup>ニ</sup>、発<sup>シ</sup>大清淨ノ願<sup>ヲ</sup>、

夫<sup>レ</sup>此菩薩者、侍<sup>テ</sup>多千億仏<sup>ニ</sup>、発<sup>シ</sup>大清淨ノ願<sup>ヲ</sup>、

垂<sup>レ</sup>憐愍<sup>ノ</sup>方便<sup>ヲ</sup>、施<sup>コ</sup>降化<sup>ノ</sup>神力<sup>ヲ</sup>。

慈悲之雲眇々<sup>トシテ</sup>、普<sup>ク</sup>澍<sup>キ</sup>甘露<sup>ノ</sup>之法雨<sup>ヲ</sup>、

5 弘誓之海漫々<sup>トシテ</sup>、広<sup>ク</sup>浮<sup>ビ</sup>濟度<sup>ノ</sup>之船筏<sup>ヲ</sup>。

無<sup>レ</sup>縁<sup>ノ</sup>之慈悲<sup>ハ</sup>廣大<sup>ニシテ</sup>、無<sup>レ</sup>親<sup>キ</sup>無<sup>レ</sup>疎<sup>キ</sup>。

無<sup>レ</sup>作<sup>ル</sup>之誓願<sup>ハ</sup>甚深<sup>ニシテ</sup>、無<sup>レ</sup>始<sup>メ</sup>無<sup>レ</sup>終<sup>ハ</sup>。

本願<sup>ニ</sup>云、一切衆生<sup>ヲ</sup>作<sup>シ</sup>仏<sup>ニ</sup>畢<sup>テ</sup>後、我<sup>ニ</sup>當<sup>リ</sup>成<sup>ル</sup>仏<sup>ト</sup>。若<sup>シ</sup>殘<sup>リ</sup>一<sup>人</sup>者、

誓<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>取<sup>ル</sup>正<sup>覺</sup>云々。

10 又如<sup>シ</sup>經<sup>ニ</sup>云、若<sup>シ</sup>持<sup>ル</sup>念<sup>ル</sup>如<sup>シ</sup>意<sup>ノ</sup>輪<sup>ヲ</sup>者、一切<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>皆<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>有<sup>ル</sup>障<sup>碍</sup>。

於<sup>レ</sup>内外<sup>ノ</sup>行<sup>業</sup>ニ、速<sup>ク</sup>カ<sup>ニ</sup>円<sup>満</sup>シ、於<sup>レ</sup>諸<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>、常<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>勝<sup>利</sup>ヲ、威<sup>光</sup>

増<sup>シ</sup>長<sup>シ</sup>、具<sup>シ</sup>大<sup>ニ</sup>自在<sup>ニ</sup>、開<sup>シ</sup>發<sup>シ</sup>智<sup>慧</sup>ヲ、得<sup>ル</sup>弁<sup>才</sup>語<sup>言</sup>三<sup>昧</sup>ヲ、音<sup>聲</sup>美

妙<sup>ニシテ</sup>、過<sup>ル</sup>現<sup>ノ</sup>一切<sup>ノ</sup>罪<sup>障</sup>無<sup>ク</sup>不<sup>ル</sup>滅<sup>ス</sup>、現<sup>当</sup>一切<sup>ノ</sup>吉<sup>祥</sup>無<sup>ク</sup>不<sup>ル</sup>至<sup>ス</sup>

云々。

15 凡<sup>ソ</sup>誓<sup>フ</sup>願<sup>ハ</sup>利益<sup>無</sup>量<sup>ナリ</sup>。以<sup>テ</sup>要<sup>ヲ</sup>言<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>、

三<sup>業</sup>六<sup>情</sup>之<sup>罪</sup>垢<sup>ハ</sup>、智<sup>水</sup>洗<sup>ヒ</sup>而<sup>不</sup>留<sup>ル</sup>。

四<sup>重</sup>五<sup>逆</sup>之<sup>業</sup>塵<sup>ハ</sup>、悲<sup>風</sup>払<sup>ヒ</sup>而<sup>無</sup>殘<sup>コト</sup>。

況<sup>シ</sup>十<sup>魔</sup>四<sup>魔</sup>ノ々<sup>々</sup>軍<sup>邊</sup>ニ<sup>挫</sup>キ、百<sup>病</sup>万<sup>病</sup>病<sup>病</sup>氣<sup>條</sup>鄰<sup>ヲ</sup>、

又<sup>レ</sup>離<sup>レ</sup>雷<sup>風</sup>水<sup>火</sup>之<sup>難</sup>、又<sup>レ</sup>無<sup>シ</sup>刀<sup>疾</sup>飢<sup>賊</sup>之<sup>怖</sup>。

20 兵<sup>戈</sup>戰<sup>陣</sup>之<sup>中</sup>ニ、得<sup>ル</sup>勝<sup>利</sup>ヲ、諍<sup>訟</sup>論<sup>訟</sup>之<sup>處</sup>ニハ、頭<sup>ハ</sup>名<sup>譽</sup>ヲ。

滿<sup>テ</sup>壽<sup>命</sup>於<sup>レ</sup>千<sup>歲</sup>ニ、招<sup>ク</sup>敬<sup>愛</sup>於<sup>レ</sup>万<sup>人</sup>ニ。

才<sup>智</sup>湛<sup>ヘ</sup>北<sup>海</sup>ヲ、巧<sup>弁</sup>流<sup>ス</sup>懸<sup>河</sup>ヲ。

加<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>、疋<sup>夫</sup>昇<sup>テ</sup>三<sup>台</sup>ニ、專<sup>ラシ</sup>觀<sup>天</sup>之<sup>禮</sup>ヲ、

傭<sup>女</sup>備<sup>ハ</sup>六<sup>宮</sup>ニ、繼<sup>ム</sup>懷<sup>日</sup>之<sup>夢</sup>ヲ。

25 就<sup>中</sup>、觀<sup>音</sup>是<sup>レ</sup>慈<sup>悲</sup>本<sup>也</sup>。女<sup>人</sup>則<sup>シ</sup>慈<sup>悲</sup>之<sup>質</sup>也。

故<sup>ニ</sup>和<sup>光</sup>垂<sup>迹</sup>之<sup>形</sup>、多<sup>ク</sup>現<sup>ル</sup>婦<sup>女</sup>ノ<sup>身</sup>ヲ、

利<sup>生</sup>感<sup>応</sup>之<sup>道</sup>、殊<sup>ニ</sup>滿<sup>ツ</sup>女<sup>人</sup>願<sup>ヲ</sup>。

何況<sup>ニ</sup>、雖<sup>トモ</sup>決<sup>定</sup>業<sup>ヲ</sup>、念<sup>ス</sup>レハ能<sup>ク</sup>轉<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>、

雖<sup>モ</sup>墮<sup>ル</sup>惡<sup>道</sup>ニ、必<sup>ズ</sup>代<sup>ハ</sup>テ受<sup>ク</sup>苦<sup>ヲ</sup>。

30 然<sup>レ</sup>則<sup>テ</sup>、振<sup>テ</sup>十<sup>方</sup>折<sup>伏</sup>之<sup>威</sup>ヲ、窺<sup>ル</sup>獄<sup>率</sup>ヲ、摧<sup>ハ</sup>刀<sup>山</sup>ヲ。

施<sup>一</sup>子<sup>慈</sup>悲<sup>之</sup>德<sup>ヲ</sup>、代<sup>テ</sup>罪<sup>人</sup>ヲ、入<sup>レ</sup>鉄<sup>城</sup>ニ<sup>者</sup>也。

經<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>、若<sup>シ</sup>誦<sup>ス</sup>ル<sup>コト</sup>如<sup>シ</sup>意<sup>ノ</sup>輪<sup>ヲ</sup>神<sup>呪</sup>ヲ一<sup>遍</sup>、如<sup>上</sup>ノ諸<sup>事</sup>皆<sup>悉</sup>得<sup>成</sup>

弁<sup>コト</sup>ヲ<sup>文</sup>。

又<sup>云</sup>、仮<sup>令</sup>仏<sup>眼</sup>墮<sup>落</sup>シ<sup>テ</sup>大<sup>地</sup>ニ、無<sup>量</sup>億<sup>劫</sup>ニモ<sup>不</sup>還<sup>本</sup>處<sup>ニ</sup>、大

35 悲<sup>誓</sup>願<sup>ハ</sup>不<sup>墮</sup>阿<sup>舌</sup>。

又<sup>云</sup>、若<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>衆<sup>生</sup>、於<sup>テ</sup>未<sup>來</sup>世<sup>ニ</sup>、誦<sup>持</sup>セ<sup>ハ</sup>此<sup>呪</sup>ヲ、以<sup>テ</sup>本<sup>願</sup>ヲ<sup>故</sup>ニ、

我<sup>來</sup>其<sup>人</sup>ノ<sup>前</sup>ニ、隨<sup>所</sup>望<sup>ノ</sup>意<sup>ニ</sup>、令<sup>ム</sup>滿<sup>ル</sup>一切<sup>ノ</sup>無<sup>量</sup>ノ<sup>大</sup>願<sup>ヲ</sup>。若<sup>ハ</sup>少

若<sup>ハ</sup>多<sup>、不</sup>果<sup>シ</sup>遂<sup>テ</sup>其<sup>悉</sup>地<sup>ノ</sup>者<sup>、不</sup>得<sup>ル</sup>名<sup>ヲ</sup>為<sup>ル</sup>如<sup>意</sup>寶<sup>珠</sup>大<sup>秘</sup>密

呪<sup>ト</sup>文<sup>。</sup>

40 如<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>、誓<sup>フ</sup>願<sup>ハ</sup>不<sup>思</sup>議<sup>甚</sup>深<sup>ニシテ</sup>、無<sup>量</sup>廣<sup>大</sup>也。

金<sup>言</sup>不<sup>誤</sup>ヲ、利<sup>生</sup>無<sup>疑</sup>。

仍<sup>大</sup>衆<sup>以</sup>伽<sup>陀</sup>可<sup>讚</sup>嘆<sup>禮</sup>拜<sup>。</sup>頌<sup>曰</sup>、

若<sup>ク</sup>我<sup>誓</sup>願<sup>大</sup>悲<sup>中</sup> 一<sup>人</sup>不<sup>成</sup>二<sup>世</sup>願<sup>。</sup>

我<sup>墮</sup>虛<sup>妄</sup>罪<sup>過</sup>中 不<sup>還</sup>本<sup>覺</sup>捨<sup>大</sup>悲<sup>。</sup>

45 世<sup>有</sup>衆<sup>生</sup>有<sup>所</sup>願 念<sup>我</sup>如<sup>意</sup>寶<sup>輪</sup>王<sup>。</sup>

隨<sup>其</sup>種<sup>種</sup>所<sup>愛</sup>衆 無<sup>不</sup>縱<sup>心</sup>為<sup>如</sup>意<sup>。</sup>

南<sup>無</sup>婦<sup>命</sup>頂<sup>禮</sup>大<sup>慈</sup>大<sup>悲</sup>大<sup>聖</sup>如<sup>意</sup>輪<sup>觀</sup>世<sup>音</sup>菩<sup>薩</sup>。

貞<sup>慶</sup>三<sup>段</sup>式<sup>ノ</sup>第<sup>一</sup>門<sup>ハ</sup>、澄<sup>憲</sup>七<sup>段</sup>式<sup>ノ</sup>第<sup>四</sup>門<sup>「</sup>本<sup>願</sup>利<sup>益</sup>門<sup>」</sup>で

ある。澄<sup>憲</sup>七<sup>段</sup>式<sup>ハ</sup>、各<sup>段</sup>之<sup>冒</sup>頭<sup>ニ</sup>、前<sup>段</sup>之<sup>取</sup>意<sup>ト</sup>當<sup>該</sup>段<sup>ノ</sup>説<sup>明</sup>

を<sup>一</sup>言<sup>述</sup>べて<sup>カ</sup>ら<sup>内</sup>容<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>（一）。す<sup>な</sup>わ<sup>ち</sup>第<sup>四</sup>門<sup>ノ</sup>冒<sup>頭</sup>ニ<sup>ハ</sup>、

第<sup>三</sup>門<sup>ヘ</sup>之<sup>言</sup>及<sup>ガ</sup>存<sup>ス</sup>ル<sup>ガ</sup>、こ<sup>レ</sup>を<sup>貞</sup>慶<sup>三</sup>段<sup>式</sup>は<sup>省</sup>略<sup>シ</sup>、「第<sup>一</sup>

本願利益門者、夫此菩薩者、待<sup>ツカ</sup>三千億ノ仏<sup>ニ</sup>と直ちに内容に入る。澄憲作の「第一門」の導入部と同一の始まり方である。

本段では、いくつかの省略が施されている。「況や」で始まる、戦闘闘諍での勝利に関する文言は省かれている(18→20)。また、「加之」で始まる身分が低い者でも宮中の極位に上りつめる喻えの部分省略される(23→24)。さらに、観音が殊に女人の願を満たすことをうたう一節(25→27)を貞慶が省いていることは看過できない。観音と女性との結びつきを殊更に強調し、女性に利益のあることをうたうこの二節は、式文の中にあつて異彩を放つ。澄憲七段式が女人の求めに応じて作成されたことを窺わせるものである。これを一括して貞慶は省略するのである。澄憲七段式の一つの眼目とも言うべき箇所であるが、これを省くことによつて三段式は、男女に偏ることなく、より普遍的な価値を帯びる。貞慶の意図は、その汎用性、より多くの者に開かれた内容の提示にあつたのではなからうか。

さて、末尾の伽陀は、三段式では八句が四句となり、後半部が削除されている(45→46)。この半減させる方法は、三段ともに共通する。式文のみならず、伽陀をもよりコンパクトにまとめているのである。伽陀は、文字句を音読し、式文とは異なつた曲節を付して唱われる。澄憲七段式には、各段ごとに八句の伽陀が存在し、長大重厚な趣きを持つ。澄憲作成の美麗な式文にはふさわしいとも言えよう。一方、式文のみならず伽陀をも縮小した貞慶の方法は、現実には法会で唱えるための工夫と捉えられる。残した伽陀の句(43→44)の選択眼も光るところである。本偈は、如意輪観音ゆかりの經典由来の文言であるが、「観音」の本誓としてう

たわれるにも相応しい内容とことばの響きを持つ。

【第二】如意福德門…澄憲七段式の第六門】

1 第六如意福德門者、前明機感相応<sup>シテ</sup>、施<sup>コトヲ</sup>福智<sup>ノ</sup>二嚴<sup>ヲ</sup>、今且<sup>ク</sup>其中<sup>ニ</sup>祈<sup>ラム</sup>福德之利益<sup>ヲ</sup>。

夫冀<sup>テ</sup>樹提伽之勝躅<sup>ヲ</sup>、開<sup>キ</sup>福田<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>即生<sup>ニ</sup>、  
伝<sup>ヘテ</sup>迦羅越<sup>ノ</sup>之妙指<sup>ヲ</sup>、招<sup>カシ</sup>宝財<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>現身<sup>ニ</sup>。

5 於<sup>テ</sup>焉<sup>、</sup>幸福<sup>ハ</sup>尤<sup>モ</sup>可<sup>シ</sup>願<sup>之</sup>。貧賤誰<sup>カ</sup>不<sup>レ</sup>厭<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>。

是以<sup>テ</sup>、菩薩<sup>ノ</sup>六度<sup>ニ</sup>闡<sup>キ</sup>檀度<sup>之</sup>之<sup>ヲ</sup>、  
止<sup>シ</sup>觀<sup>ノ</sup>五緣<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup>衣食<sup>之</sup>之助道<sup>ヲ</sup>矣。

出<sup>テ</sup>瞻<sup>テ</sup>肩<sup>ヲ</sup>、懷<sup>キ</sup>劣等輩<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>恥<sup>ニ</sup>、  
入<sup>テ</sup>屈膝<sup>ヲ</sup>、無<sup>シ</sup>顧<sup>ニ</sup>親屬<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>力<sup>ニ</sup>。

10 況<sup>シ</sup>富者<sup>、</sup>隨<sup>テ</sup>緣<sup>ニ</sup>自然<sup>ニ</sup>殖<sup>ヘ</sup>善種<sup>ヲ</sup>、  
貧者<sup>、</sup>觸<sup>レ</sup>事<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>慮<sup>ニ</sup>犯<sup>ス</sup>罪根<sup>ヲ</sup>。

故<sup>ニ</sup>或<sup>シ</sup>說<sup>キ</sup>閻浮提<sup>ノ</sup>衆生<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>由<sup>テ</sup>貧<sup>ニ</sup>墮<sup>ツト</sup>惡道<sup>ニ</sup>、  
又<sup>シ</sup>演<sup>ズ</sup>諸苦<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>貧苦<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>第一<sup>ノ</sup>苦<sup>ト</sup>云々。

15 然<sup>レ</sup>今<sup>、</sup>此菩薩者象宝部摩尼門<sup>ニ</sup>、持<sup>シテ</sup>如意宝<sup>ノ</sup>珠玉<sup>ヲ</sup>、  
衆生<sup>ニ</sup>与<sup>ヘ</sup>財福<sup>ヲ</sup>、行者滿<sup>ツ</sup>諸願<sup>ヲ</sup>矣。

經<sup>ニ</sup>云々、若<sup>シ</sup>於<sup>テ</sup>此生<sup>中</sup>、欲<sup>ス</sup>求<sup>フ</sup>現報<sup>ヲ</sup>諸<sup>ノ</sup>惡業<sup>ヲ</sup>薄福<sup>ノ</sup>衆生<sup>ニ</sup>、充<sup>テ</sup>滿<sup>ス</sup>三世<sup>ニ</sup>出世間<sup>ノ</sup>無上<sup>ノ</sup>果報<sup>一切</sup>所望<sup>ヲ</sup>文。

如<sup>レ</sup>儀軌<sup>云</sup>、誰<sup>カ</sup>有<sup>ム</sup>薄福<sup>ノ</sup>者<sup>、</sup>当<sup>ニ</sup>滿<sup>ス</sup>一切願<sup>ヲ</sup>云々。

20 准<sup>スルニ</sup>隨<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>如意輪經<sup>ニ</sup>云、是<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>雨<sup>ラ</sup>於<sup>テ</sup>無量<sup>ノ</sup>財宝<sup>ヲ</sup>如意宝珠<sup>也</sup>。  
速<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>世間<sup>ノ</sup>一切財<sup>ヲ</sup>故<sup>也</sup>。

又<sup>シ</sup>云、我<sup>速</sup>令<sup>メ</sup>得<sup>ル</sup>美妙<sup>ノ</sup>七宝<sup>ノ</sup>衣服<sup>ノ</sup>飲食<sup>ノ</sup>及<sup>テ</sup>妻子<sup>ノ</sup>眷屬<sup>ノ</sup>車乘<sup>ノ</sup>城邑<sup>ノ</sup>滿

足ニスルコトヲ取意。

然則、於如意輪ニ、聞名ヲ、懸テ憑ミ、作一花一香ノ善之ノ菓、

25 摸シ形ヲ、凝シ信ヲ、運ニ稱一礼ノ行ヲ之ノ族、

窮王家之懷福ヲ、縦輪王数万之福利ヲ、

豊人臣之資貯ヲ、預ラ居士至德之良財ニ。

加之、生スレハ福徳智慧之男ヲ、耀シ榮暉ヲ於九重ニ、

賜ハ端正衆相之女ヲ、施コス敬愛ヲ於一朝ニ。

30 茲ヲ以テ、矜季倫之福庭ニ、飾リ錦障ヲ於五十里之地ニ、

遊テ須達カ之財苑ニ、披シ花堂ヲ於四十余之院ニ。

然則、六度四接者、始メ自初門ニ、満足シ之ヲ、

百福万徳者、迄テ于極位ニ、円満ス之ヲ。

仍各以伽陀、可讚歎礼拜。頌曰、

35 持宝蓮勝幢 幢中出妙声 誰有薄福者 当滿一切願  
摩尼蓮花部 多人所敬愛 此即如意輪 能成諸事業

南無帰命頂礼大慈大悲如意輪觀自在菩薩三反

第二門では、まず冒頭の前段および本段の紹介部分が改変されて整えられている。澄憲七段式に言う「前ニ明ヲ機感相応シテ、施コトヲ福智ニ嚴ク」(1)とは、前の第五段の内容を示したものである。これを貞慶三段式は、「先ニ明シッ本誓悲願。今祈ニ福徳ノ利益ヲ」と書き換える。前段への言及は段の配列に従って改変し、本段の内容を示す文言(2)は澄憲七段式をそのまま採ったものである。改変部分は、第四門の「前ニ明シッ形声ノ応用ヲ、次ニ明サ本誓ノ悲願ヲ」(前段1行目)に拠る。

さて本段には、注意すべき異同が存する。それは、以下の文字

の相違である。「是以テ、菩薩ノ六度ニ闡キ檀度ノ之ノ濟行ヲ、止觀ノ五縁ニ先ニ衣食之助道ヲ矣」(二重傍線部。6(7)の部分)を、貞慶三段式は、以下のようにしている。

是以、菩薩ノ六度ニ闡キ檀度之ノ濟行ヲ、止觀ノ五縁ニ失フ衣食之助道ヲ矣。

ちなみに、七段式『如意輪講式』の諸本のひとつである書写山圓教寺蔵本も、貞慶三段式と同じ字句である。

是ヲ以テ、菩薩ノ六度ニ闡キ檀度之ノ濟行ヲ、止觀ノ五縁ニ失フ衣食之助道ヲ矣。

書写山の七段式、貞慶三段式が、「闡」「失」と記している。澄憲七段式の他本は、大覚寺に蔵される別本(第四七函三号)も高山金剛三昧院本も「闡」「先ニキトス」であり、文意に照らしても本来の字句は「闡」「先」であったと思われる。これらの異同を鑑みるに、当該の文字については、貞慶独自の改変というよりは、七段式あるいは三段式の本文伝来の問題と捉えられるであろう。

本段では大きな省略はないが、「加之、生スレハ福徳智慧之男ヲ、耀シ榮暉ヲ於九重ニ、賜ハ端正衆相之女ヲ、施コス敬愛ヲ於一朝ニ」(28(29)の一对が省かれている。こゝは、前段の「第一 本願利益門」にて、男性女性の宮中における榮達を謳う箇所を省いたと同様の意図と構想によるものである。段をまたいで一貫した構想で整えられていることもわかる。

【第三「往生極楽門」…澄憲七段式の第七門と結章文】

(第七門)

1 第七往生極楽門者、前ニ既ニ明シッ今生ノ所求ヲ。今当ニ願フ来世出

離<sup>ヲ</sup>。

如<sup>シ</sup>經<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>、非<sup>ス</sup>但現世<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>ミ大福利<sup>一</sup>、亦於<sup>テ</sup>當生<sup>ニ</sup>獲<sup>ト</sup>大功徳<sup>ヲ</sup>。

5 夫以<sup>ハ</sup>、名利<sup>ハ</sup>生死之絆、結<sup>フ</sup>三塗之鉄網<sup>一</sup>。  
道心<sup>ハ</sup>菩提之翅、翔<sup>ル</sup>九品之金台<sup>一</sup>。

不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>歎<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>悲<sup>シ</sup>何<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>。

然<sup>レ</sup>我<sup>等</sup>著<sup>シ</sup>妖艶之色<sup>一</sup>、盛<sup>テ</sup>齡稍<sup>ニ</sup>闌<sup>一</sup>、  
婪<sup>テ</sup>邪慢之名<sup>一</sup>、余命愈<sup>ニ</sup>疾<sup>一</sup>。

10 譬<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>於<sup>リ</sup>山水<sup>ノ</sup>泡沫<sup>ニ</sup>、浮生難<sup>ク</sup>墮<sup>マ</sup>リ。

寄<sup>レ</sup>心<sup>ヲ</sup>於<sup>リ</sup>郊原之薤<sup>一</sup>、露命易<sup>ク</sup>消<sup>ス</sup>。

雖<sup>モ</sup>後<sup>ト</sup>雖<sup>モ</sup>前<sup>ト</sup>、冥途遂<sup>ニ</sup>不可<sup>レ</sup>行<sup>ク</sup>之路<sup>一</sup>。

雖<sup>モ</sup>淹<sup>ト</sup>雖<sup>モ</sup>速<sup>ト</sup>、生死必<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>徵<sup>マ</sup>之彊<sup>也</sup>。

悲哉、被<sup>ト</sup>拘小縁<sup>一</sup>、徒<sup>ニ</sup>送<sup>リ</sup>星霜<sup>一</sup>、

15 迷哉、怖求<sup>ス</sup>世間<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>運<sup>フ</sup>年<sup>月</sup>。

實<sup>ニ</sup>可<sup>キ</sup>厭<sup>フ</sup>者<sup>一</sup>、三界六道之栖<sup>也</sup>。不<sup>レ</sup>厭<sup>ハ</sup>惡趣<sup>ニ</sup>易<sup>キ</sup>婦<sup>ノ</sup>故<sup>也</sup>。

尤<sup>モ</sup>可<sup>キ</sup>欣<sup>ム</sup>者<sup>一</sup>、九品十衆之台<sup>也</sup>。不<sup>レ</sup>欣<sup>ハ</sup>淨土<sup>ニ</sup>難<sup>カ</sup>生<sup>レ</sup>之故<sup>也</sup>。

然<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>此菩薩者、為<sup>リ</sup>船師大船師<sup>ト</sup>、渡<sup>ク</sup>中<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>之迷津<sup>ヲ</sup>、

為<sup>シ</sup>導師大導師<sup>ト</sup>、送<sup>ル</sup>西方之覺岸<sup>ニ</sup>矣<sup>一</sup>。

20 安養<sup>ニ</sup>号<sup>シ</sup>弥陀<sup>ト</sup>、設<sup>テ</sup>行願莊嚴之淨土<sup>一</sup>、

娑婆<sup>ニ</sup>現<sup>シ</sup>觀音<sup>ヲ</sup>、迎<sup>テ</sup>欣求極樂之衆生<sup>一</sup>。

是以<sup>テ</sup>、十念成就之終<sup>ニ</sup>、捧<sup>テ</sup>蓮台<sup>ヲ</sup>而迎接<sup>シ</sup>、

九品往生之始<sup>ニ</sup>、轉<sup>シ</sup>法輪<sup>ヲ</sup>而教化<sup>ス</sup>。

何況、無障礙經<sup>ニ</sup>、說<sup>キ</sup>捨此身後則生<sup>ル</sup>西方<sup>ト</sup>、

25 金輪呪經<sup>ニ</sup>、演<sup>テ</sup>命終往生極樂世界<sup>ト</sup>。

我等<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>往生極樂之願、觀音<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>引接西方之盟。

我等<sup>ガ</sup>所<sup>カ</sup>發<sup>ス</sup>願望<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>叶<sup>ヘ</sup>リ彼<sup>ノ</sup>所立之本誓<sup>一</sup>。

往生<sup>セム</sup>淨土<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>何<sup>ノ</sup>疑<sup>カ</sup>哉<sup>一</sup>。

然則、苟<sup>モ</sup>詣<sup>テ</sup>黃金瑠璃之庭上<sup>ニ</sup>、瞻<sup>シ</sup>觀音紫摩之聖容<sup>一</sup>、  
30 忝<sup>ク</sup>跪<sup>テ</sup>赤梅檀之樹下<sup>ニ</sup>、拜<sup>シ</sup>弥陀白毫之妙相<sup>一</sup>、

即<sup>チ</sup>聞<sup>テ</sup>一<sup>ヲ</sup>實<sup>ノ</sup>道<sup>ヲ</sup>、斷<sup>シ</sup>三<sup>ニ</sup>重<sup>ノ</sup>無明<sup>ヲ</sup>、

終<sup>ニ</sup>開<sup>ニ</sup>仏<sup>ノ</sup>知見<sup>ヲ</sup>、入<sup>ラ</sup>菩薩<sup>ノ</sup>正位<sup>ニ</sup>。

出<sup>ル</sup>離生死<sup>ノ</sup>大願<sup>一</sup>、已<sup>ニ</sup>滿足<sup>ス</sup>。

世々生々<sup>ノ</sup>大幸、何事<sup>カ</sup>如<sup>カ</sup>カム之<sup>ニ</sup>哉<sup>一</sup>。

35 仍<sup>レ</sup>各住<sup>シ</sup>決定往生之願<sup>ニ</sup>、可<sup>ク</sup>讚<sup>カ</sup>礼<sup>シ</sup>弥陀觀音<sup>一</sup>。頌曰、  
若人恒念大士名、當得往生極樂界

面見如來無量壽、聽聞妙法証無生

願我臨欲命終時、尽除一切諸障礙

面見彼仏阿弥陀、即得往生安樂國

40 南無婦命頂礼大慈大悲大聖如意輪觀世音菩薩<sup>三三反</sup>

(結章文)

41 抑我等婦<sup>ニ</sup>如意輪<sup>ニ</sup>、仰<sup>カ</sup>本誓<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>、預<sup>リ</sup>慈悲<sup>ニ</sup>生<sup>ル</sup>方便<sup>ニ</sup>、遂<sup>ケ</sup>テ

往生極樂<sup>ノ</sup>蓄懷<sup>ヲ</sup>、拔<sup>ク</sup>濟堪<sup>ハ</sup>力<sup>ニ</sup>、昇<sup>進</sup>得<sup>ル</sup>方便<sup>ヲ</sup>。(中略)

仍大衆住此願、以伽陀可讚歎<sup>ノ</sup>礼<sup>ヲ</sup>。頌曰、

我既往生彼國已、現前成就此大願

45 一切円満<sup>ニ</sup>盡<sup>ス</sup>無<sup>レ</sup>余<sup>一</sup>、利益<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>界</sup>

願<sup>ニ</sup>以此功德<sup>一</sup>、普<sup>ク</sup>及<sup>テ</sup>於<sup>リ</sup>一切

我等<sup>ノ</sup>與<sup>ル</sup>衆生<sup>一</sup>、皆<sup>ク</sup>成<sup>リ</sup>成<sup>リ</sup>仏道

南無婦命頂礼大慈大悲大聖如意輪觀自在菩薩<sup>三三反</sup>

命終決定往生極樂自他法界平等利益<sup>三三反</sup>

最終段の「往生極楽門」では、四つの対句を省略している（5、7、10、11、12、13）。命の儚さと遅速はあれども死は免れ得ないことを、比喩を用いて情感豊かにうたう部分で、これらを省くことよって式文の初中盤を軽くしている。

注目すべきは、もとよりの「往生極楽門」の伽陀（36、39）を載せずに、その後の「結章文」の後半の伽陀（46、47）を用いて接合させていることである。結章文の最後の偈「願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成佛道」は一切衆生が功德により成仏することを願うもので、現在も広く用いられる有名な偈である。そもそもは『法華経』化城喻品に見える偈であり、源信作と伝えられる『二十五三昧式』に用いられている（伝源信作『地藏講式』「舍利講式」にも本伽陀が載せられる）。ちなみに、貞慶の『観音講式』でも、その他の講式においても、本伽陀は広く用いられている。澄憲七段式の最後を締め括る廻向伽陀を、貞慶はもとよりの「往生極楽門」の伽陀に替えて配置して、三段式を閉じるのである。貞慶三段式は澄憲七段式のような結章文を持たず、廻向としてのまとめを意識してこの伽陀を接合させたと思しい。

内容面で注目すべきは、観音のみならず阿弥陀に関わる部分を貞慶がそのまま載せていることである。七段式は、「安養ニ号弥陀、設行願莊嚴之浄土、娑婆ニ現シ観音、迎テ欣求極楽之衆生。」（20、21）、「我等ニ有往生極楽之願、観音ニ在テ引接西方之盟」（26）、「可讚歎礼拜弥陀観音」（35）と、「往生極楽門」にふさわしく阿弥陀仏の引接に及んで説く。これらの部分を、貞慶は略することなく三段式に載せている。このことに関わって、貞慶の三段式『観音講式』に以下のような式文が見出せることには注意を払っ

ておきたい。第三段「祈来世引接」に、「弥陀是観音之本師、観音者極楽之補処」とある。貞慶は、観音信仰を強く持っていたが、その背後に阿弥陀信仰があったことをうかがわせるのである。<sup>18</sup>この式文は、澄憲七段式を貫いて説かれる如意輪観音と阿弥陀仏の世界と同じ地平にある。伽陀に入る箇所では、「可讚歎礼拜弥陀観音」（35）の七段式文言をそのまま採り、貞慶三段式でも同様に、阿弥陀・観音を並べて極楽往生を願う道が印象づけられている。

#### おわりに

具に澄憲七段式と貞慶三段式を照合させると、貞慶がいくに澄憲の作品に取り組み、一個の作品として仕上げたかが浮かび上がってくる。澄憲の『如意輪講式』は、対句を駆使した高度に優れた修辭に充ち満ちて、ひとつの講式としても表現のレベルにおいても後代に大きな影響を与えている。貞慶は、いち早くその価値に気づき、それに学んだ一人ではなかっただろうか。

貞慶は、生涯にわたって自らの信仰のありようを見つめ続けたことが知られている。講式撰述に沿って言えば、五段式・三段式の『観音講式』を草した後、笠置から海住山寺に移り、七段式の『観音講式』（値遇観音講式）を著した。極楽往生を願いつつも、自らの行いに照らして観音信仰を深め、補陀落浄土への往生をいっそう希求するようになったのであった。<sup>19</sup>貞慶のそのような思索の変遷を傍らに置いて考えると、三段式『観音講式』に立ち現れる観音および阿弥陀の描写が、『如意輪講式』の世界と近いこと

は看過できない。三段式『観音講式』には、「如意輪経」を引く部分がある。第三段に、以下のように見える。

如意輪経云、「始從今日乃至成仏、不墮惡道、常生仏前」。後生諸要文可足。  
〔一〕は引用者

この「如意輪経」とは、『仏説観自在菩薩如意心陀羅尼呪経』（義浄訳）を指す。本経には、右の経文が字句そのままに見出せる。興味深いことに、この経文は澄憲七段式にも引かれているのである。結章文の掉尾を飾る部分に、以下のようにある。

又如<sup>シ</sup>経云<sup>カ</sup>、始<sup>メ</sup>自<sup>リ</sup>今日<sup>ニ</sup>乃至<sup>ス</sup>成<sup>ニ</sup>仏<sup>ト</sup>、不<sup>レ</sup>墮<sup>ス</sup>惡<sup>ニ</sup>道<sup>ト</sup>、常<sup>ニ</sup>生<sup>ス</sup>仏<sup>前</sup>。  
仏前<sup>ニ</sup>文<sup>ト</sup>。

如意輪観音の本願と功德が印象的に語られる箇所である。澄憲七段式に引用された経文を、貞慶もまた自らの『観音講式』に引くのである。貞慶『観音講式』と澄憲七段式の近さがうかがわれよう。ここに加えて言えば、貞慶が改作にあたって七段式から選択した三段は、いかにも如意輪観音の特質を表す章段ではなく、如意輪を超えた観音としての誓願や功德をうたう内容を持つものと見なし得る。その選択と構想こそ、貞慶の営為として見逃してはなるまい。貞慶が澄憲の七段式を手にした時期は不明であるが、少なくとも三段式『観音講式』を著した時期を遡るであろう。そして、三段式『如意輪講式』の撰述と、『観音講式』撰述の時期は、さほど隔たらないと推測する。

これまで、講式述作の一大潮流をかたちづくった人物として、貞慶・明恵が双璧と捉えられてきたが、その少し前の澄憲の営みは、両者の活躍を考える上で重要であろう。講式は、法会で広く行われ、聴衆への影響が大である。貞慶も、澄憲の講式に多くを

学んだのではなからうか。

ひとつの講式が改変されて別個の式としてかたちを成し、法会で営まれたらう実態を、この二つの講式は具体的に示してくれている。貞慶が、澄憲の作品を直に取り上げ、手を加えている事実は、両者の関わりに一石を投じるであろう。殊に、貞慶が叔父の澄憲に寄せる眼差しが、改作の方法を通じて看取される。改作によって原態をとどめないほど異なった式として立ち現れる事例もあるが、貞慶はそのような改変をしなかった。もとよりの美文を尊重するかのごとく、修辭に十二分に配慮して省略を施し、一篇の講式に仕立てている。

本稿に論じてきたように、各段の選択、省略した文字句、あるいは残した文字句には、貞慶の確かな意図が存している。貞慶は、澄憲を受け継ぎつつ、自らそれに挑むがごとく三段式として構想し、ひとつの講式として練り上げたのであった。

### 【注】

(1) 佐々木邦世「よみがえる「信の風光」——秀衡の母請託『如意輪講式』を読む」(中尊寺仏教文化研究所『論集』創刊号、一九九七年五月)に早く取り上げられている。

(2) 大覚寺には、佐々木邦世が紹介した一本(第四八函八号)と、第二門の後半から存する一本(第四七函三号、嘉暦二年写本)の、計二本が所蔵されている。いずれも鎌倉時代の書写本である。

(3) 柴「書写山圓教寺藏『如意輪講式』解題と翻刻」(千葉大学『人文研究』四六号、二〇一七年三月)に紹介した。

(4) これら『如意輪講式』の資料的価値の一端については、仏教文学会例会シンポジウム「講式研究の第二ステージへ」(二〇一八年四月二日、於仏教大学)にて、「澄憲と講式―『如意輪講式』を起点として―」と題して発表を行った。

(5) 柴「醍醐寺蔵 貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻」(千葉大学『人文研究』四七号、二〇一八年三月)に論じた。

(6) 貞慶の講式についての研究は多く積み上げられており、学恩に与った。ニールス・グリユベルクの「講式データベース」<http://www.f.waseda.jp/guelberg/koshiki/kdb/main/koushi.html>、『特別陳列 講式―ほとけへの讃嘆―』(西山厚執筆、奈良国立博物館展示図録、一九八五年)、西山厚「講式からみた貞慶の信仰―『観音講式』を中心に―」(『中世寺院史の研究』法蔵館、一九八八年)、苔米地誠「『貞慶作『観音講式』訳注』(『大正大学総合仏教研究所年報』一九号、一九九七年三月)、同「解脱房貞慶の『観音講式』について―密教浄土教信仰をめぐる―」(『智山学報』四七号、一九九八年)、山田昭全著作集第一巻『講会の文学』(おうふう、二〇一二年)、大正大学総合佛教学研究会編『貞慶講式集』(山喜房佛書林、二〇〇〇年)、展示図録『解脱上人貞慶―鎌倉仏教の本流―』(奈良国立博物館、二〇一二年)など参照。

(7) 高野山大学図書館寄託金剛三昧院本による。

(8) 醍醐寺蔵本による(後述するように、本書は、三段式『如意輪講式』と表裏で書写されたものである)。以下、貞慶の三段式『観音講式』はこれによる。

(9) 醍醐寺蔵、第二一五函一二号。グリユベルクがこの書き付

けについて夙に言及し、「貞慶作カ」としている(前掲注6、講式データベース)。また、澄憲七段式との関係についても、「内容的には、澄憲作如意輪講式(七段)の改作と思われる。」と述べる。

(10) これら書写の問題と現在の形態については、注5論文に詳細を述べた。

(11) 大覚寺蔵、第四八函八号。

(12) 醍醐寺蔵、第二〇八函一六号。三段式『観音講式』表白冒頭。

(13) 表白の表現の詳細については、柴「澄憲と『如意輪講式』―その資料的価値への展望―」(小峯和明監修「シリーズ日本文学の展望を拓く」第五巻『資料学の現在』(目黒将史編)、笠間書院、二〇一七年)に論じた。

(14) 三段式『観音講式』が、「世間男女」のために起草されたことも思い合わされる。

(15) 仏教文学会例会シンポジウムにて言及した。

(16) 七段式における当該文字の異同については、注3および注5論文にても論じた。

(17) 結章文は、冒頭部と結末部のみ式文を載せた。行番号は、「往生極楽門」に続けて付した。

(18) 西山厚による『特別陳列 講式―ほとけへの讃嘆―』(前掲注6)の解説に触れられている。西山厚「講式からみた貞慶の信仰」、同「解脱上人貞慶の信仰と活動」(前掲注6、展示図録『解脱上人貞慶』)をも参照。

(19) 前掲注18の西山厚論文、新倉和文「貞慶著『観世音菩薩感

應抄』の翻刻並びに作品の意義について―阿弥陀信仰から観音信仰へ―」（『南都仏教』九二号、二〇〇八年十二月）、楠淳證「貞慶の弥陀信仰再考―本願念仏臨終来迎論と報化一体同処論による「本入報土」の展開―」（『南都仏教』九三号、二〇〇九年十二月）など参照。

（20）「前」は、底本に「師」<sup>国</sup>とあるが、他本はいずれも「前」。

謝辞 大覚寺ならびに醍醐寺、圓教寺には、貴重な資料の閲覧と紹介のご許可を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。  
付記 本稿は、科学研究費補助金（挑戦的研究・萌芽）<sup>17K18478</sup>による研究成果の一部である。

（しば・かよの 千葉大学文学部）